

昭和五二年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079  
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

八五春闘への基本視点(一)	.....	2
「向坂逸郎先生追悼集会」に二千人	.....	3
「古典」と現代労働運動(二)	.....	5
——改良闘争と改良主義——	.....	
『社会主義への準備——先進国革命	.....	
をめぐって』について	.....	8
階級闘争はどこでも同じ	.....	9
——英炭労のたたかいと日本労働運動——	.....	
エチオピアの飢餓と資本主義の宣伝	.....	11
向坂逸郎先生を語る	.....	
『青年に寄す』を心に	.....	13
「向坂逸郎との対話」を準備したい	.....	14
火山のよう な 情熱	.....	15
先生との出会いで社会主義者に	.....	15
先生から学んだこと	.....	17

# 旬刊 社会通信

NO. 259

一九八五年三月二日

一九八五年三月二日  
(毎月一日・二日・三日三回発行)

## ■巻頭言■

## 八五春闘への基本視点(一)

春闘三〇年。日本労働運動はかつてない危機にある。春闘の主導権を全民労協に奪われ、全民労協がのさばりだしたからか。現象的にはそうだ。だが、本質はちがうところにある。

第二次大戦後、総評は日本労働運動を「構造的に」代表した。階級的労働運動の旗を高く掲げ、改良のたたかいに全力を尽くしたからだ。総評はこんにち階級的労働運動の路線に誇りと自信を失いつつある。総評の敵対者として生み出された同盟・J・Cと、考え方に相違がみられなくなった。これこそ、日本労働運動の危機の最大のポイントである。

総評労働運動とは何か。理論面、実践・運動面にみよう。

第一。総評は科学的社会主義をみずからの指導理論とした。現在、科学的社会主義の理論は放棄され、西欧「社民」がモデルとされている。これでは同盟・民社とかわらない。

第二。総評は「反独占・反自民」「全野党共闘」をその政治路線として掲げた。こんにち、「反独占」の姿勢はうすくなった。「反自民の多数派形成」が強調される。同盟の従来の考え方だ。いま、同盟は自民との連立に向かっている。

第三。総評は職場の日常闘争の基礎を「反合理化」においた。生産性向上運動反対はその必然的帰結だ。だがこんにち、「反合理化」の姿勢は弱まった。総評方針案にはあるかなさかの有様だ。これとともに「参加・介入」論、「制度・政策要求」が幅をきかせはじめている。

第四。総評は賃上げでも「賃金は労働力商品の代価」と、大幅賃上げを要求した。これまた、最近の傾向では独占が喧伝する生産性基準原理に屈し、いわゆる「整合性」論へと墮落した。

第五。情勢分析の視点もまた変わった。体制間矛盾論は消失し、いわゆる「多極化」論が大手を振って歩いている。

理論的動揺は実践的・運動論的な動揺、墮落を生み出す。

第一。総評労働運動は組合員を基盤に進められた。労働運動の力の源泉である、いわゆる大衆闘争だ。大衆闘争が職場を基礎にたたかわれるのはあたりまえだ。だが、「参加・介入」「制度・政策」の声とともに、組合員の出番は少なくなった。

第二。組合民主主義も形骸化していることだ。大衆運動は、幹部組合員に原則を思い出させる。それとともに、組合員は幹部と融合する。「英雄なきたたかき」こそ、組合民主主義成長の基礎となる。

このように、総評は同盟・J・C路線にかぎりなく近づいているのであるから、春闘、労働運動は戦争だ。階級戦という戦争だ。戦争に勝利するため、指導部は兵士を励ますことが必要だ。勇気を与え、士気を鼓舞することが必要だ。だが、今の総評指導部にそれは望めない。彼らの考え方は、同盟・J・Cと変りないものになっているからだ。

そこで問われるのが自覚的な労働者、組合員の任務である。情勢はたしかに、きびしい。敵・独占の攻撃は荒々しく、威丈高で、執拗だからだ。多くの組合の情勢分析は、敵・独占の「強さ」ばかりを強調している。これでは戦(いくさ)にならぬ。再度、情勢を何のために分析するのかが問われなくてはなるまい。

情勢分析とは、第一に反撃への条件をつかみ、第二に闘いへの展望と確信をもち、第三に日常闘争の大きな意義を考えることにある。こうした視点で情勢をみると、敵・独占の攻撃とその本質は一変する。

## 「向坂逸郎先生追悼集会」に二千人

三月六日、その日の東京はどんよりとした曇り空であった。都内では、国労第一四三回拡大中央委員会、自治労第四七回臨時大会、全通第八五回中央委等の機関会議が相次いで開かれていた。国労では武藤委員長が今春闘を「反行革春闘」と位置づけ、「国鉄の分割・民営化や福祉水準の切り下げなどを阻止するための国民的な反撃態勢づくり」を呼びかけた。また全通の森原委員長は「ストなし春闘五年間、陳情・請願のやり方には限界」と、今春闘ではストライキ態勢を確立してたたかう決意を表明した。「現状をなんとか打破したい」との意志のあらわれだ。

九段会館では社会主義協会が主催する「向坂逸郎先生中央追悼集会」が午後六時から開かれた。舞台中央に社会主義協会の赤旗、そして先生の遺影が、先生のもっとも愛した言葉「哲学者たちは世界をいろいろに解釈したにすぎない。しかし、問題は世界を変えることである」とともに掲げられた。舞台の両そでには九本ずつの真紅の赤旗一八本が並び、演壇中央には白い花とともに三池労組のヘルメット、「資本論」が添えられた。どこまでも簡素であった。それでいて心打つ舞台づくりであった。

集会は上野建一衆議院議員の司会で進んだ。「同志は倒れぬ」斉唱、佐藤保社会主義協会事務局長による開会の辞、スライド（向坂逸郎先生の足跡）上映、飛鳥田一雄・日本社会党前委員長、岩井章・総評元事務局長のあいさつ、川口武彦・社会主義協会代表による講演「向坂先生を偲ぶ」、そして向坂先生のゆかりの深い組織を代表して木原実・労働大学学長、善明建一・社青同委員長、灰原茂雄三池労組元書記長が「先生の遺志を継ぐ」決意表明をおこなった。午後九時、「インターナショナル」斉唱で集会を終えた。

集会には約二千名が出席、決意を新たにする緊迫感にみちた集会であった。先生の多くの仲間との精神的連帯を示すものであろう。若い東京の仲間たちとともに地方の仲間たち、白髪を混らせた年輩の仲間たちが多かったのも特徴であった。

開会の辞で佐藤氏は、「反動の嵐、どんな権力、弾圧、金力も歴史の発展法則は否定できぬ。法則をつかみ、わが物として適用する不屈の実践力で法則は実現する。団結と結束の力で困難を切り開こう」と、述べた。

社会党副委員長で現在、憲法擁護の運動の先頭に立つ飛鳥田氏は、先生は「遠い存在」から「こわい人」へ、そして最後には「おやじ」としての存在となったと、こう懐い出を披歴した。

「私の一生は先生につきていた。昭和一〇年代、学生るとき、先生の論文に学んだ。日本資本主義論争の頃には、この先生に学びたい」とメモをとり読んだ。両派の論争のなかで私の意見は定まった。その頃は遠く、親しく教えを受けたわけではない。遠い、忘れたい恩師であった。もし許されれば九大にとんでいきたいと思っただけだ。

戦後、大牟田に三ヶ月ぐらい滞在了した。オルグか国会議員かと疑ったぐらいに。残念なことに『向坂教室』には出席しなかった。先生は理論は行動によって実現していくことをみずから体現された、学者としてただ一人の人である。先生の万分の一でも努力したい。先生はこうして「こわい」先生に変わった。原水禁運動が分裂したとき、私は国

民運動委員長をやっていた。分裂直後の大会時、先生は大会会場で私に「分裂は正しくない。敵にむかって対決し、互に手をとる。同時に理論においても正しい。この二つを実行することが大事」。『国民運動委員長はおやめなさい』といわれた。私はその場で「ハイ」と答え、やめた。その副産物で横浜市長になった。私は「こわい」先生が好きだ。

「おやじ」としての先生は、七七年、党を分裂させることは敵に妥協することと、成田委員長にいわれ、委員長になってからだ。しばしば先生に足を運んだ。先生は「妥協はけっこう。しっかりと本心をもち筋をたてて妥協せよ」「改良主義は現実を変えない」「生きている間に社会党政権をつくってくれ」とたびたびいわれた」と。

最後に先生の遺志を継ぐ決意をこう表明した。  
「ファシズムの足音が高く聞こえてくる。管理ファシズムの足音だ。先生の論文から不転の覚悟を学びとろう」と。

岩井氏も先生をもっとよく知る人だ。ソウメンを食べながら、三池收拾についてはなしたと、現在の労働運動、社会主義運動のあり方に心をいたためたであろうことを、一つひとつ自らに語りかけるように話された。さすが岩井さんと思わせたのが、先生のまいた種を育てる、そのために先頭に立つ決意を表明されたことだ。

「いまの労働運動はたたかう前からまけている。これは妥協じゃない。妥協とは精一杯たたかってこそはじめてなしえる。現状の労働運動をどう盛り返し、現局面をどう切りかえすか。理論を具体的に提起することが問われている。私の責任もここにある。そのため、みなさんから知恵を借りたい」と。

こうして、川口武彦社会主義協会代表が「向坂先生はその生涯のどの時代も徳然として生きられた。これは先生の思想の確信、マルクス主義の確信から発していたといえる。歴史的法則に対する確固たる理念と信念が先生の生涯を貫いている」と、先生の業績を詳細に講演。あらためて先生の偉大な生き方をわれわれに示された。

「遺志を継ぐ」決意を表明した木原氏は、先生なしに労大の創立も歴史もなかったこと、先生の希望は「労大を二年制の大学にすること」だったと、数百万、数千万の「まなぶ」に全力を上げることを表明した。

善明氏は、今年、社青同は二五周年を迎えること、先生がいわれた「私になりたいのは社青同同盟員」の言葉を胸に、社青同綱領にもとづき社会党、総評の強化に全力をつくすといわれた。

灰原氏は、先生のカミナリと細心の注意を語った。「少し休め」といわれたこと、三池の大争議のとき、衛生問題にまで留意されたはなしである。

三時間にわたった集会はあっという間に終わった。閉会の辞で高沢寅男衆議院議員は、「この集会は先生のを継いで進むの心が一つになった集会」といい、「一人ひとり小さくとももう一人の逸郎をつくる、全国に何千何万の逸郎をつくる。そして総評、社会党を強める。科学的社会主義を実現する出発の日にしよう。」と締めくくった。

## 「古典」と現代労働運動(二)

— 改良闘争と改良主義 —

### 失業と労働運動

こうして、相対的過剰人口が形成されてくる(他の要因も、もちろんある。プチブルや農家の二男、三男のプロレタリア化など)。その失業者のプールは、資本主義には、なくてはならぬものであって、マルクスは『資本論』で説明する。

「大量の人間が突然、しかも、他の部面における生産規模を損傷することなく、決定的な点に投ぜられうるのだからなければならない。過剰人口がこれを供給する」

景気循環のなかで、好況がやってきた時の必要条件を述べている。資本の運動法則を学び、労働者に資本主義の下では、失業が不可避であることを説明し、社会主義にしてゆく必然性を訴えなくてはならない。

失業が不可避であること、だから放っておけば良いということとは違う。失業は、労働者の生存条件を奪う。だから反対し、結束し、抵抗しなくてはならない。

しかし、法則として失業は不可避である。たたかい、妥協し、中間駅で総括し、隊をたて直すことは当然である。なぜなら、失業をなくするためには、労働力を商品として売る社会を転ぶくしないかぎり、ダメだからである。

日本共産党のような改良主義者や、反戦のような無政府主義者には理解できなくとも、労働者がマルクスの学説を身につければ、いとも簡単に理解される。

本部の戦術云々を大会でえらそうに批判できる前に、邪魔のかぎりを尽くし、資本主義の本質を知ろうとしない玉碎主義、社会主義・プロレタリア独裁を否定し、いつまでも資本の運動法則にはんろうされることを望む政治的中立主義こそ自己批判されなくてはならない。批判さるべきは、改良主義、無政府主義の者どもである。

### 労働組合と組合費

マルクスは手稿「労賃」のなかで「組合が労働者たちに負担させる費用は、たいてい、それが獲得しようとする利益よりも大きい。組合は継続的には競争の諸法則に反抗しえない」と述べる。それなのに、労働者が組合に結集しようとするのは愚であるとするブルジョア経済学者達の意見に次の様に述べる。

「もし、労働組合における現実の問題が、ただ問題らしく見えること、すなわち労賃の決定だけであって、労働と資本の関係は永遠的なものだとすれば、これらの団結は必然的に成功しないで挫折するであろう。だが、労働組合は、労働者階級の結合の手段であり、階級対立をとまなう旧来の全社会の転ぶくのための準備手段である。そして、この立場からすれば、この内乱により労働者たちが、戦死者や負傷者や金銭において、どれだけの犠牲を要するかを、彼らのまえで計算して見せる賢明なブルジョアの学校教師たちのことを、労働者たちが嘲笑するのは当然である。敵を撃破しようとするものは、敵との戦闘の費用を論議しないであろう。」

ところが日本共産党の諸君は、その議論をもちこみ、ブルジョア経済学者達が正しかったことを証明しようとするのである。

### 政党と労働組合

共産党宣言の一八九〇年ドイツ語版序文には「労働者の解放は労働者階級自身の仕事であらねばならない」とエンゲルスが述べているが、日本共産党によると、その仕事は、政党がやることであって、労働組合は、経済闘争をやる団体に引き下げられてしまう。労働者階級の圧倒的多数は賃上げ闘争にとどめ、政治的対決からは引きはなす役割を、あのだらない「特定政党支持ヤメヨ」の論理は持っているのである。

レーニンは、論文「労働組合の中立性」の中で次のように述べている。

「プロレタリア闘争が比較的未発達で、組合に対するブルジョアジーの系統的な働きかけがなかった時代には、プロレタリア闘争の最初の基盤をひろげる手段として、組合の中立性を主張してもよかった。だが、現在、国際社会民主主義運動の見地から組合の中立性を主張することは、もうまったくその時機でない。」

「メンシェビキは、党の目的と労働組合の目的との間に古典的マルクス主義的に、厳密に正統派的に境界線を引いた。彼らは言った。『社会民主党の任務は、資本主義的諸関係を絶滅し社会主義制度をうちたてることである。労働組合の任務は、労働の利益に有利な働き手の販売条件をかちとるために、資本主義制度の限界内で労働条件を改善することである。』ここから、労働組合は無党派のものであり、『ある職業の労働者の全員』を包括するものであるという結論が導きだされた。ボルシェビキは現在では、政治と職業との区分を厳密におこなうことはできないことを証明し、ここから『社会民主党と社会民主党の指導すべき労働組合との間には堅い結合がなければならない』という結論に達した。」

「われわれは、いつ、どこでも、組合と労働者階級の社会主義政党との接近を主張しなければならぬ。けれども、あれこれの国で、あれこれの民族のあいだで、どの政党がほんとうの社会主義政党であり、労働者階級のほんとうの政党であるかは、別固の問題である。それを決定するのは、国際的な大会の決議ではなくて、もろもろの民族の政党の間の闘争の経過である。」

「ブルジョアジーの階級的利害は不可避免的に、現存の制度を基盤とする些末な狭い活動に組合を制限し、社会主義とのあらゆる結びつきから組合を遠ざけようとする志向を生みだす。そして中立性の理論は、これらのブルジョア的志向の思想的な外皮である。」「組合と革命的社会民主主義派との堅い結びつきが必要であるという理論とはちがって、組合の中立性の理論はプロレタリアートの階級闘争をにぶらすことを意味するような改善手段を不可避的にえらぶことになる。」「中立主義がもつとも重視するものは、労働者の状態の改善のために彼らを結合することであって、プロレタリアート解放の事業に利益をもたらすことのできる闘争のために彼らを統合することではないのである。」

以上見てきたように、レーニンの思想に反し、労働者階級の解放を口先ではいうが、実際には改良主義におちいつているのが日本共産党である。

## 改良闘争と改良主義

レーニン「マルクス主義と改良主義」の中で説明している。

「自由主義的ブルジョアジーは、一方の手で改良を与えながら、他方の手ではいつでもそれを取りもどし、それを無にしてしまい、改良を利用して労働者を隷属させ、彼らを個々のグループに分裂させ、勤労者の賃金奴隷制を永続させようとする。だから、改良主義が全く誠実なものである場合すら、それは実際には、ブルジョアジーが労働者を墮落させ、無力にするための武器に転化する。あらゆる国での経験は、労働者が改良主義者を信頼すると、いつもばかにされる結果になることを示している。

反対に、労働者がマルクスの学説を身につけていれば、すなわち、資本の支配が維持される限り、賃金奴隷制が不可避であることを知っていれば、彼らはどのようなブルジョアの改良によってもだまされることはないであろう。資本主義が維持されている場合、改良は決して永続的なものでも本格的なものでもないことを理解している労働者は、改善のために闘い、その改善を、賃金奴隷制に反対する闘争をもっと頑強につづけてゆくために利用している。改良主義者は施し物によって労働者を分裂させ、瞞着し、彼らを階級闘争から、そらすことに努めている。改良主義の虚偽を知った労働者は、自分たちの階級闘争の発展と拡大のために改良を利用するのである。」

現在の日本共産党は、もはやマルクス・レーニンから遠くへだたつて余りある。その主義主張は科学的でなく、空想的ロマンチズムである。彼らは「県の財政分析をやった『展望』を『示そう』と言う。しかし、これとても、レーニンは、「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」の中で否定する。「賃金奴隷制の社会で公平無私な科学を期待するのは、資本の利潤をへらして、労働者の賃金をふやすべきではないかという問題について、工場主たちに公平無私を期待するのと同じ、まぬけな無邪気さなのである。」もう、てんでレーニンは相手にしていない連中と、同レベルにあるのが現在の改良主義者たちである。

長い長い引用だらけで、私見のほとんどない投稿となつてしまった。しかし、まじめな改良主義者達に対しては、われわれは自分の頭の中が改良主義・モノ取り主義であつては、決してうち勝つことはできない。

私たちの職場でも、当局は改良主義者と改良闘争をたたかう仲間たちを分断してくる。たとえばAさんには仕事をどんどん押しつけるが、Bさんには、やさしい課長があてられている。当局は、そのようにして改良主義者達の活動を保証し、組合をトゲのないものにしていくのだから、各自がマルクスから学び、労働者にはどんな一生がわくはめされているのか、どうしてそのようなからくりとなっているのか、自分達はどうしたら良いかを、現場の労働者と話し合い拡げるしかない。マルクス・レーニン主義を勉強し、さまざまな改良主義の潮流にマルクス・レーニンにもとづいた批判を展開してゆけばよい。ぼくはそう思う。

(兵庫・F)

## 『社会主義への準備— 先進国革命をめざして』について

本書には、昨年の九月から二月にかけて『青年の声』に連載された「大量失業—資本主義における失業の不可避性」の内容が含まれているが、もちろん、本書全体の内容はこれだけにつぎるものではない。

日本社会党は結党四十周年を迎えたが、まず四十年の論争史をふりかえりながら、『道』見直しの背景、ねらい、本質等を説明し、『八〇年代路線』や『構想』が『ニュー』どころか、もつとも『オールド』な国民党論の焼直しにすぎないなどその正体を徹底的に暴きだしている。そして、改良主義というものは、どんなに装いを新たにしても、必ず階級国家論と矛盾するばかりか、資本主義的蓄積の法則（失業の不可避性）「窮乏化法則」）とも矛盾し、現実的に破産する必然性があることを、あらゆる角度から証明している。

たとえば、『構想』の具体化として策定された『中期社会経済政策』のなかの原発容認への政策転換が党大会で事実上否決されたように、また、かつて国労の提唱した「民主的規制」という名の「参加・介入」路線が、現実の国鉄合理化を軸とする行革攻撃のなかで客観的に破産したように、『構想』の「参加・介入」路線、およびその具体的政策としての資本主義経済実質五%成長を柱とする『中期社会経済政策』も、必ず客観的に破産するであろうが、問題は、思想闘争と現実の闘争強化を通じてそれを理論的・実践的な破産に追いこみうる主体的条件をいかに構築するかということである。もしそれができないならば、かつての「経済民主主義」という名の「参加・介入」路線が一九二九年の世界大恐慌によって現実的に破産したにもかかわらず、当時の労働者階級が「参加・介入」路線にまきこまれ、体制内化していたために、あの未曾有の資本主義の矛盾の爆発を社会主義革命によって根本的に解決することができずに、ついにファシズムから第二次世界大戦へと流されてしまったという歴史的悲劇と過ちをくりかえすことになりかねないからである。つまり、このような資本主義体制の特殊の危機の深刻化は、そのとき主体的条件の成熟をともなっていれば革命の客観的条件となりうるが、もし主体的条件を確立できなければ、逆にファシズムを生む条件となりうるだけに、資本主義の矛盾の発展によって必然的に成熟する革命の客観的条件に、主体的条件の成熟を正しく適応させる以外に、いわゆる「先進国革命」を成功させることはできないことを明らかにしている。

すなわち、反合理化闘争によって「訓練され結集され組織される反抗の増大」を中心的な力とする広範な反独占民主主義擁護の統一戦線の結成を通じて憲法改悪を阻止し、平和革命の条件を守りながら、革命の客観的条件の成熟を見誤ることなく、ただちにそれに適応しうる主体的条件の準備をととのえることに成功しない限り、しかも、社会主義革命の直後においても、つまりプロレタリアート独裁の樹立による搾取の廃絶の直後においても、ただちに「全人民的な記帳と統制」の組織化に移り、共産主義の第一段階としての社会主義社会の建設に移るための準備をととのえておかなければ、「先進国革命」を成功させることはできないことを明らかにしている。



「社会主義への準備」という題名をつけたのはこのためであるが、それとともに「真の『先進国革命』をめざして」という副題をつけた理由は、今日ユーロコミュニズムをはじめ「先進国革命」を標榜するものが、いずれも「ソ連型社会主義との訣別」を口実にマルクス・レーニン主義そのものとの「訣別」をはかっているために、「ソ連型」と「先進国型」とを対立させることがいかに誤りかを明らかにする必要があると同時に、たんなる「型」の問題ならば、革命の形態だけでなく、社会主義建設のあり方においても、先進国と後進国とは当然異なったものとならざるをえないことを明らかにしつつ、真の「先進国型」を追求する必要があると考えたためである。

そのばあい、避けることのできない問題は、社会主義と価値法則の問題である。周知のように、マルクス、エンゲルスは、社会による生産手段の掌握とともに商品生産は除去されると述べたが、ソ連などでは革命後六十数年を経ても、まだ商品・貨幣関係が除去されていないという現実があるからである。そこで最近中国は、百年以上前に書かれたマルクスの見通しが妥当でなくなつたとして、マルクスの「限界性」あるいは「時代遅れ」を公式に指摘したと報道されている。

そこで本書は、ソ連などにおける商品・貨幣関係存続の根本原因を説明するとともに、マルクスは「時代遅れ」どころか、「先進国革命」のばあいは、マルクス、エンゲルスの科学的学説に立脚して、その社会主義建設のあり方についても見通しておく必要があることを証明している。

(十月社刊、千五百円)

(著者より——この場を借りて誤植を一つだけ訂正させていただきます。二〇二頁七行目可能↓不可能)

## 階級闘争はどこでも同じ

— 英炭労のたたかいと日本労働運動 —

「イギリス炭労につづけ」という、同志の手による力強い横幕がはられた会場で、二月一日、「イギリス炭労に連帯する京都集会」が開かれた。わずか一週間の呼びかけにもかかわらず、京都労働者総合会館の会議室では、六〇人の定員に一〇〇人を越す労働者が結集し、熱気であふれかえった。最初、「一五人位の部屋で懇談を」と言われていたのだから、実際にたたかっている労働者への、活動家の関心の深さがあらためて痛感された。

京都労研センターが中心になって、実行委員会が主催したこの集会で、主催者として歓迎のあいさつを京都総評谷内口事務局長がおこない、最後の、海を越えて連帯してたたかう決意を固める「団結ガンパウ」を同じく京都総評吉田議長がおこなった。

イギリス炭労書記長の親書をたずさえて参加したジョン・パロズ氏の報告で、確認され注目された点は次の六つであった。

一つはイギリス炭労ストは、日本の国鉄闘争とまったく同じ性質のものであるということだ。炭労ストは、サッチャーが就任し、炭労をはじめとする強い労働組合をつぶそうと計画をはじめたときから、すでに闘争は開始された。議会、警察、裁判所、マスコミあげ

てのデマ宣伝、集中攻撃がなされている。警察とピケ隊との「衝突」でも、事実経過を組みかえての報道までされ、加害者にしたてられ、炭労の評判はいちじるしく落とされた。反行革闘争の、そして国鉄闘争の見事な手本がイギリスに現に存在するということだ。

次は、青年労働者の役割である。そのめざましい成長ということだ。イギリスでも彼らは「ビデオ世代の落とし子であり、労働運動ではもはや役にたたない」と思われていた。だがこのストのなかで政治的にもめざめてきて、みちがえるように成長してきた。彼らの先輩より立派な労働運動の担い手になるかもしれない。それはどのような学習によっても得ることのできないものだ。

三つに、婦人もまた自らを組織し始め、活動を始めた。伝統的な家事に従事することから越え、妻や娘やおばさんたちがたちあがり、「婦人行動委員会」をつくりピケ隊にも参加した。いろんな集会でも婦人がどんどん発言する。イギリスの警察はこれを理解できず、最初なすすべを知らなかった。そこで彼らがまずやったことは、警察の側で婦人警官を導入することだった。三池闘争での主婦会の果たした役割をここでくり返すまでもあるまい。主婦会の組織づくり、「家族ぐるみのたたかい」は、洋の東西を問わず、たたかひの法則性なのであろう。

四点目は、党の強化ということである。パローズ氏の住んでいる地域では、このたたかひの中で労働党の党員が倍にふえた。「百万党建設」を言ひみごとし失敗し、「十二万党」づくりを言っている党が、今、何をどうしなければならぬかを白日のもとにしてゐる。

五点目は、日本はもとよりアジアに來られたのは初めてのパローズ氏だが、つくづく何度も感慨深げに述べられたことがある。それは「労働者はどこに行っても同じだ」と。資本主義体制のもとで労働者の抱える問題は本当に共通しているなど、強調されたことである。イギリス炭労は労働者としてまったくあたり前の要求をしてたかかっている。特別な要求は何もしていない。それなのにここまでも攻撃されている。私たちは中曾根、レーガン、サッチャーという共通の敵とたたかっている。彼らが集って相談しているのだから、われわれもまた手をたすさえてたかかっていくべきだ。反行革統一闘争とは、日本国内のものだけではないということだ。

最後に、パローズ氏が「息をひきとるまで資本家とたたかひ、働く者の社会をつくるためにたたかひたい」と、たたかうイギリス炭労を代表して、不屈な階級的立場を明らかにされたこと。かつては六〇年三池闘争に惜しみない支援をおくり、ともにたたかひたイギリス炭労の今回のストライキは、このような階級的立場があつてのものである。

組合財産の三分の二まで資本家の管財人にさしおさえられ、生活保護の適用さえ受けられないよう、法律改悪された中での困難なたたかひである。会場カンパ四万一、五三六円と各労組ごとの陣中見舞がパローズ氏に手渡され、「真の国際連帯をあらわすものである」と、謝辞を受けた。

われわれもイギリス炭労につづこう！

(京都・I)

## エチオピアの飢餓と資本主義の宣伝

DDR(ドイツ民主共和国)の社会主義統一党の機関紙「ノイエス・ドイチュランド」二月十一日付は、エチオピアのバーハヌ・バイー干ばつ救援調整国民委員会代表がADN記者に答えたインタヴューを掲載した。日本においてもブルジョア・マスコミが「救援」を声高に叫んでいるが、他方でエチオピアの革命的政権にたいする非難もくり広げている。プロレタリア国際主義の立場からこの問題を考える上で参考になると思われる。

### 干ばつの原因と現政権のとり組み

エチオピアのバーハヌ・バイー干ばつ救援調整国民委員会代表は、ADNのインタヴューですでに長きにわたっている社会主義諸国との緊密な関係を指摘した。「ソ連・DDRはじめ社会主義共同体の国々は、もう何年もの間、搾取と抑圧から解放され、自立した経済、社会秩序をエチオピアに築く際に、わが国を支援してくれています。そして今、わが国民がもっとも厳しい干ばつの被害をあらゆる力、あらゆるたくわえを動員して克服しようとしているこの時に、社会主義兄弟諸国はあらためて真の誠実な同盟者であることを示してくださいました。」

エチオピアにとって、干ばつ期は一つの常にくり返される現象である、とバーハヌは説明する。この原因はとりわけ、何百年もの間森林が無規則に伐採されてきたこと、遊牧民族の莫大な家畜群が草地を荒廃させていること、そして耕地が人口増加にたいして過度な負担を受けていることにある。これらの原因と他の要因が何百年もの間、気象条件および農業生産にとって不利な作用をもたらしているのである。

一九七四年にハイレ・セラシエ皇帝下にあった反動的な封建的・資本主義的な独裁政権を倒した進歩的・革命勢力は、当初よりこの複雑な問題全体にとり組んできた、とバーハヌは強調する。

「われわれは皇帝独裁政権を倒した後、ただちに国立の救済・再生委員会を設置し、大量の物資を備え、広範な権利を与えました。そして同委員会はこの間、干ばつに苦しむ地域住民にたいして十分な救援を保証することをやりとげたのです。このようなことはエチオピアにおいてかつてなかったことでした。けれども、一九八四年にも雨期がやってこない段階でようやくその規模が明らかとなった今回の干ばつ災害は、有史以来最悪のものであり、われわれの能力を超えたものになってしまったのです。」

そのため、エチオピア政府はすでに八四年初めに、国立救済・再生委員会を越えて、国際世論に訴え、危機にさらされた生命を救うための援助を請うことに踏み切ったのである。「何の前提条件もなく、また撤回するようなこともなく、ただちに有効な援助を行なったのは社会主義の国々でした。」西側においてはこの非常事態はしばらく口を閉ざしていた。エチオピアは、干ばつの被害をとり除くために資本主義諸国でとり組まれている救援の呼びかけや寄付金・物資活動に感謝している。

「しかしわれわれはいくつかの西側諸国が試みていることにも正確に事態を見守って

います。つまり彼らは干ばつによって生じた複雑な状況を、エチオピアにおける革命的な発展に終止符を打ち、われわれの革命をつぶすために利用しようとしているのです。」

#### 西側の中傷キャンペーン

西側の報道において、干ばつに結びつけられてエチオピアの革命政権にかつてない扇動的なキャンペーンがされている。中傷的報道は言う。「エチオピアは政治的問題を、干ばつに苦しむ人々を犠牲にして解決するために、自然災害を利用している」と。これを救援活動の中止の口実にしようとしている。資本主義的報道が大がかりにくり広げている中傷キャンペーンは、とくにエチオピア北部の干ばつ危険地帯から南西部の土地が肥えている地域に住民家族を移民させることにも向けられている。

「一九七四年以前に西側の専門家たちが多くの研究を重ね、干ばつに脅かされたり、人口が過剰な地域からの人間の移動を皇帝政権に推奨していたのです。それが今になって、革命的政権がようやくこの賢明な考えをとり上げ、その実現のための手段を整えている時に、われわれを非難しようとするのです。」

#### 口約束を続けるアメリカ政府

社会主義諸国が干ばつとの闘いのためにただちに有効な援助を果たしてくれたこと、そして今も続けていることは議論の余地のない事実である。アメリカ合衆国政府は数千トンの穀物援助を約束したが、実際にはいまだに一トンの穀物もエチオピアに届いていない。合衆国からのこれまでの寄付金・物資は私的な救済組織やアメリカの勤労者の基金からのものである。

エチオピアにおいて歴史の歯車を巻き戻すことができるなどというのは、たいへんな誤算である、とバーハヌは強調する。

「わが国の人民はわれわれの側に立っているし、われわれは強力かつ誠実な同盟者を持っています。どのような困難、障害があろうと、われわれは社会主義的な発展の道を歩み続けます。このことをいかなる脅迫的な政策も妨げることできません、なぜならただ社会主義においてのみわが国民は自分の能力を展開させることができるし、彼らの幸福をめざしてわが国が発展できるからです。」

#### ソ連、DDRの援助の具体例

ソビエトは今年一月にアソッサ・ベンシヤガル郡に移動可能な野外病院を設置した。ここでは一五七名のソビエトの医師、看護婦、研究員、技師が任務についている。

近づくのも困難な干ばつ地域に、ソビエトは二四のヘリコプター、一二機の大量輸送機、数百台のトラックを動員し、物資の運搬および干ばつ地域住民の移動をおこなっている。

DDRから空、海を通じてエチオピアに向かった即時救援物資（食料、トラック、 TENT、毛布医薬品等）は、エチオピア政府が救援を求める声明を出してから、五千五百万マルク（約四七億円、一マルク＝八五四円で計算）に達している（以上、二月一四日付「ND」紙より）。

## 向坂逸郎先生を語る

松里福慈

### 『青年に寄す』を心に

社会主義協会代表であり、日本の社会主義運動、労働運動の指導者として労働者解放の運動を援助し指導してこられた向坂逸郎先生は一月二二日午前零時五八分亡くなられました。

日本社会党四九回定期全国大会が一九日に終了し、そのわずか三日後の未明でありました。日本の社会主義運動・日本社会党の歴史と共に歩まれた先生を偲び、日本社会党が反独占、社会主義、階級闘争路線（首切り反対、反「行革」、反合理化統一闘争）を堅持し、労働者・勤労国民の先頭になってたたかっていたために一生懸命努力していくことを決意しています。

私は今、向坂先生から記念にいただいた『資本論』（岩波書店、全三巻四分冊）を手にしていますが、「一九七四年 秋」と署名されています。国労本部の専従（青年部長）を退任し職場復帰（国労旭川地方本部名寄駅分会）する時にいただきました。

この本の「訳者まえがき」——『資本論』百年を迎えるに当たって——の中で、向坂先生は次のように書かれています。

「『資本論』は、必ずしもやさしい本ではない。しかし、額に汗して働く人々には、必ず分る本である。いわば、彼ら自身の自信であるからである」

「『学問に坦々たる大道はない。ただ、学問の急峻な山路をよじ登るのに疲労困憊をいとわない者だけが、輝かしい絶頂をきわめる希望をもちうる』というマルクスの言葉を、最後に書き記しておく。一九六七年夏」

私は（私を知る、先輩・同志はよく御存知であるが）、勉強・学習が不十分であるので、いつも反省している。『文章・原稿が書けなくて困っている、（書く）努力はしてもダメだ』というように、常々言訳をしているような実態がある。

向坂先生の書かれた『青年に寄す』（労働大学）をあらためて読んでみました。

一九七〇一九九頁の「学ぶということ」に書かれている次のことを真剣に追究していきたいと考えています。

「私は、社青同の諸君に、（決して、社青同の同志に限らないと思う・筆者）どんな労働苦の中でも勉強してもらいたいと思う。勉強とは、必ずしも本を読むことのみではない。勉強とは、人生のあらゆる経験を自分の成長の糧にすることである。しかし、本を読み、マルクス主義の理論を身につけることは、勉強の第一に位するものである。」

「この人々の主要な著書は、ことごとく読むような心がけをもって読んで良い。一日に一

○頁ずつ読んでも、一ヶ月には三〇〇頁読むことが出来る。どんな忙しい人でも、一日一頁ぐらい本が読めないことはない。要はその決心をして、それを持続することである。つまらんことになるべく時間を浪費しないようにする心掛けが大事である。」

「われわれは、敵のあらゆる攻撃に勝たなければならぬ。われわれの一人ひとりがあるために心とからだを武装しなければならぬ。」

社会主義革命という高貴な任務を背負っているわれわれが、一日一〇頁のマルクス・エングルス・レーニンの読書にたじろぐなどということがあっていいものだろうか！

最後に、階級闘争路線を「まなび、たたかい、組織する」ことを決意して、先生を偲びたいと思います。

(社青同本部)

## 「向坂逸郎との対話」を準備したい

加茂 詮

一九五三年のある日であったろうか、私は先生に、「君はヤクザっぽいところがあるね」といわれたことがある。一瞬ドキッとすると同時に、ムカッともし、そして一体どういう意味だろうか、とも思ったように記憶する。一度言いだしたら、矢でも鉄砲でももって来い、という姿勢になったり、いよいよよとなると開き直ったりすることか、あるいは文学的・芸術的素養をはじめとする教養のなさをいわれたものか、はわからない。だが、しばらくして先生の口から出た言葉は、「実は僕も若いころにそういうところがあったねー。だから言うんだよ」であった。この一言で、この時の私がどれくらい救われ、どんな気持ちになったかを想像して頂きたい。

向坂先生とはそういう人である。多くの人は先生を評して、よく怒る、よく叱られた、という。たしかに私も、一九五一年の八月六日に（と以前に何かに書いたが、今ではそれほど定かではなく、あるいはもう少し早かったかもしれない）、はじめて等々力（とどろき）の旧宅に伺ってから約三十五年の間に、教え切れないほど叱られた。だが、先生の怒り、叱りには常に愛情の裏付けがあった。この裏付けを感じ取るかどうか、イデオロギーや細かい考え方の違い以前に、人々が先生との間に溝をつくるかどうかの分れ目になったと思う。先生自身の口をかりれば、「僕がどなるのは、愛情の表現だよ」というわけである。

私は当初、真向から「人間・向坂逸郎」論に取り組むほどの気持ちで身構えた。ここに書いた「先生の怒り」のほかに、「ことの大小の判断」、「だまされるべきウソと叱るべきウソ」、「せいたくとケチ」、「俗物と本物」、「敵のミスと味方のミス」などなど、こうテーマづけただけで、多くの人にそれぞれの想い出がつきないであろう事柄が、限り無くふき出して来る。とうてい本誌のスペースでは書ききれぬものではない。

だからというわけではないが、最後に私は一つの提案をしたいと思う。それは、できるだけ多くの人に（できなければ限られた人々に）先生との会話をなるべくその日時とともに想い出して貰って書き集め、「向坂逸郎との対話」という本をつくってはどうかであろうか、ということである。

先生とお別れて日も浅い段階での想い出の一文に代える次第である。（経済学者）

## 火山のような情熱

鈴木千鶴子

向坂先生御夫妻にお目にかかったのは、終戦の年百瀬嘉郎さんの御紹介で夏の初めの頃であった。長女の慶子が七、八ヶ月でぶうぶういいながら膝の辺りにまつわっていた。あれから四十年、私の友三歳山の横山英一・和子夫婦ともども長いおつき合いになった。横山夫婦の素朴な人柄がお気に入られたと思う。

大体先生は一旦つき合ったら長くて、百瀬さん然り、宿は明神館、松本へ下ったらレストランのたいまんと決まっていた。私も横山氏も子供達の就学、就職、結婚まで親身になって心配していただき、特に四人共結婚式には夫妻で列席して頂き本心に嬉しかった。

若気の至りで『資本論』を読みたいといったら、社会科学辞典とローザルクセンブルグの本を送って下さり、女性にもこんな人が居たのかと目の鱗の取れた思いがしたが、『資本論』は一向にわからず、残されたいのちの内に一日一頁でも読もうと覚悟している。

三池の大雪の頃お汁粉を食べによった喫茶店でアサヒグラフを見たら向坂教室の事が大きくなっていて、『向坂を殺せ』と書いた立看板の前に立つ先生の大きな写真も出ていて、一度も伺っていなかっただけにびっくりした。理論と実行静かな先生の火山のような情熱に感銘を受けた。父を早く亡くし、夫とも別れて子育てをしていた私はよく出かけて行って相談をおかけた。子供達も又孫達も「おじいちゃん」とおひざにぶら下がったり、だっこしたり、鈴木家名物の雑然とした茶の間でお食事を上げたり、先生はお豆の煮たのがお好きだった。十人も十二人も集まっとうっかりしていると自分のお皿が空になるような騒々しさの中の優しいお顔を忘れる事が出来ない。本物の人を子供達にみせたい、というのが私の子育ての願望だったが、百瀬さんに感謝申上げるのみである。何度も叱られた。怠惰をゆるさぬきびしさが今は懐かしい。冬の日東京から松本に帰り外に出ると頬をよぎる風がびゅっという。その快さが先生を思い出させる。今日ゆき夫人からお便りをいただいた。先生在る所必ずゆき夫人があった。信念を貫いて生きた先生は一人ではなかった。大笑いと云うか実に晴れやかな写真が先生の生涯を物語っているように思う。さようなら向坂先生。

(松本市浅間温泉)

## 先生との出会いで社会主義者に

稲村 守

東北の片田舎に育った私は部落差別の存在を知らなかった。高校時代に立寄った本屋で初めて部落問題の本を読み、驚きとともに言いしれぬ憤りを感じた。このようなことが平凡とまかり通る社会とは何だろう、大学にはいったら『資本論』なるものを何がなんでも読んでみよう、そんな決意で関西に出てきた。

大学に入学してまもなく、手にしたのが岩波新書の『資本論入門』だった。向坂先生の清潔な文章とひたむきさにひかれ、『社会党左派』に漠然たるあこがれを抱いた。

そんな私が入学二年で学内の講演会を企画する任についていたとき、「向坂先生はどう？」と声をかけてくれた方が二年上の先輩にいた。現在『社会主義』編集部におられるN女士である。七二年十月二四日に開いた講演会には六百人を越える学生が集まった。当時立命館大学で「民青同盟員が三千人」と言われた時代だから、開催にこぎつけるまでの苦労は、なかなか当事者以外には理解しにくいと思う。

そこで、「資本論をまず読む！」という先生の迫力に圧倒され、京都中の古本屋を回っては、先生の本を買い求めた。狭い三畳の下宿で『資本論』の学習会も始めた。最初はあふれかえるほどだったが一人減り、二人減り——、二人だけになった。二人で一年以上かかって第一巻を読み通したが、二巻目にはいつてはばらくしたら、もう一人もやめていった。一人で学習を続けていたら、「すまん」と一年ぶりにH君があらわれ学習会を再開した。

Nさんに連れて行っていただき、H君と向坂先生宅に初めてお邪魔したのが七四年の正月だった。先生は「一生に一度でいいから社会主義国に行ってきたさい」と言われた。七八年夏、キューバの平和友好祭に参加する幸運に恵まれ、報告冊子をつくりお贈りしたら、「社会主義国を実際にごらんになってよかったですね」といねいなご返事をいただいた。

その向坂先生宅訪問後、H君と私はすぐ社青同に加盟し、社会主義協会にも入会した。八十年二月、私は京都名物「魷頭」をお持ちし、先生宅に伺った。先生は「明治維新もそうだったように、日本の歴史は京都から始まる。書いたものは全部取っておきなさい」と言われた。そして自伝『流れに抗して』にサインをしていただいた。

私が本気になって運動を始めようと思ったのはこのときからだ。京都の先輩・同志とともに、右傾化に抗して、左派結集を本格的に着手することとなった。

それからは魷頭をお持ちし、たびたびお邪魔することになる。京都でやっていた講演会・集会や知事選、労研センターのことなど一々はいっさい私もお話しなかった。だが大好物を召しあがりながら、ヨチヨチ歩きの私たちを目ガネの奥から、すべて知り尽くしてニコニコと見守ってくださっていたように思う。

八三年春の京都府園部町長選挙で、妻と私が暴力事件にあったときには、何度も何度も心配していただき恐縮した。八四年初めに社会主義協会兵庫支部代表であった妻の父・平田辰男がなくなったときも、たいへんな励ましの言葉をいただいた。

日本革命をなしとげるためには、労働者・勤労大衆とともに苦闘し、確固とした進路を示す指導部・社会主義政党が必要だというのが、向坂先生の信念だった。その指導部に指針を与えるべき組織が誤った方向を歩まぬよう、先生は最後の努力を尽くされた。八三年九月一四日のある会議では、一人の学者のあまりにも事実を歪曲した発言に対し、先生は思わず大きな声を出された。私も知らないうちに大声を出していた。

八四年五月の連休明けに、朝鮮民主主義人民共和国を訪れる前にお邪魔したのが、最後の訪問となってしまった。先生は反共和国宣伝の巧妙さと多さに驚かれ、怒られた。そして先生は「運動は今はおちこんでいるが、必ず上を向く」と、指で示された。「それが歴史の法則だ。きつとなる」と。

それが私にとっての先生の「遺言」となった。

(京都総評)



## 先生から学んだこと

富久尾 忠

一九八五年一月二三日の夜、私は教組の仲間と勉強会をやるべくその会場に着いたら一番若い〇さんが「向坂先生がなくなつたのよ」。私「えっ」、その後は沈黙だった。

その日は映画「日教組の二〇年」という白黒のを見た。日教組の結成、賃上げ、安保、勤評、学力テスト等々のあふれんばかりの労働者のエネルギーを感じた。向坂先生のなくなった日にこんな映画を見るとは何となく心の引きしまる日であった。

思えば、この一〇年位私も大きな隊列うしろの方で脱落しないようにと必死になって歩んで来た。先頭で旗を振って方向を指し示してくれたのが向坂先生にやはりなるんだと思つた。

私は向坂先生に直接会つたことはなく、講演を三、四回聞いた程度。あとは書物を読んだだけである。が、私なりの印象を書いてみたい。

はじめて話を聞いたのは、一九七四年二月か三月に九段会館で講演会がありT氏に誘われて行ったときである。話の詳しい内容は忘れたが、演題がたしか「社会主義政権について」。それとあまり関係ないことを話しておもしろいおじいさんだなあと思つた。

「あんまり笑わんでくれ」と言いながら巧みに参加者を引き込んでいった。

その会場で流れていた「インターナショナル」は明るく、リズムカルであり行進曲風で、こんなに明るい「インターナショナル」を聞いたのは後にも先にはなく初めてでした。それから独特の一拍子の拍手もひどく印象に残った。向坂先生も「お別れ会」のとき「インターナショナル」に送られたそうだが感無量のものがある。

その後先生の論文などを読んで勉強してきたのが、私なりに学んだことを順不同に書いてみる。

## 社会主義について

一 社会主義革命を行うには客観的条件と主体的条件が必要であり、科学的方法で客観的情勢の分析を行いそれに対応するための主体的条件をつくりあげなければいけないということ。

二 私達にできることは主体的条件をつくることであり、それは組織をつくることである。組織された力がすべてであるということ。

三 知識は力であり労働者はしっかりと目的意識をもって学習する必要があること。

四 我々は条件がなければ社会主義を実現できない。楽観的じゃないといけないということ。

## 歴史について

五 歴史をつくるのは人間だ。だが人間は勝手に歴史をつくれぬ。与えられた条件の中でしか歴史をつくっていけない。だから我々は歴史を形づくってきた歴史的法則をみいだすことが重要であること。

六 歴史をみる視点も今は民主主義の国で百パーセントよい、だが昔はそうじゃなかった

式の見方は誤りであり、現代（資本主義の世の中）をどう変革するかという視点で社会の生成、発展、没落を見ていくこと。

七 歴史をみると必ず階級対立が存在している。現代でいえば労働者階級と資本家階級が対立している時代である。そのところを忘れずに世の中を見ていくこと。

八 小さな失敗や誤りにこだわらないで、常に歴史の大道を歩むこと。歴史が大きくどういう方向にむかっているかを見極めて進んでいくこと。

九 歴史的必然性を意識した人間が主体的行動に転化することを実践というんだ。それを忘れてはいけないし、実践しなければいけないこと。

日本の社会主義運動について

一〇 労農派は正しかった。なぜなら科学的方法で歴史をみてきたり、分析してきたからである。だから自信をもってやっていくことが大切であること。

一一 労農派の党派性をもって活動することが重要であり、労農派といわれる人々の論文を読んでしっかり勉強する必要があること。

一二 日本の社会主義革命を語るとき明治維新の位置付けがポイントになること。だから科学的方法で分析する必要があること。

一三 敗北から学ばなければだめだ。教訓を学ぶことによってきたえられていくのだ。

一四 指導者は冷静でなければいけないこと。どんなときでも冷徹に客観的条件と主体的条件を分析し方針をだす人でなければいけないこと。

一五 社会主義をめざそうと考えている人は自分の親を大切にすること。そして自分が「埋草棄石」になることを覚悟すること。

その他

一六 自分の一生を一労働者として過ごすこと。

一七 三池闘争からなぜあのような闘いになったのか、そしてそこまでいくまでの過程をしっかりと勉強すること。

一八 ソビエトは社会主義の国である。ロシア革命やその後の世界の社会主義運動に果たした役割を見極めること。ロシア革命における主体的、客観的条件と指導者（レーニン）の役割を勉強する必要があること。

最後に向坂先生が何かの講演会で「ぼくはいちどでもよいから、日本における社会主義を見て死にたい。窓口を見るだけでもいいんだ。これがぼくの願いだ」というようなことを言っていたが、先生の生きている間に社会主義を実現することができなくて非常に残念であるが、労働者階級の解放をめざす闘いが若い世代に託されたのであるから今後も頑張っていきたい。